



オレゴン留学日記 (6)

早稲田大学教育学部 3年・オレゴン大学へ留学中

清沢 健二



長かった雨季も終わりが近づき、オレゴンにも暖かい春の兆しが見えようとしています。アメリカで見るとは思わなかった、満開に咲いた桜もキャンパスを彩り、残り2ヶ月を切ってしまったオレゴンでの生活に華を咲かせています。今回のINFOEは、私が留学している間の最後のものになります。これまで私が考えてきたこと、そして今やっている友人学園でのインターンと、それから先につながるこれからの目標について、取り留めもなく筆を取らせていただこうかと思えます。

友人学園でのインターン

今回の春タームでは、毎日の授業が午後2時から始まるという、とてもゆったりとした生活を過ごしています。そこで週2回、友人学園という日本語イマージョン教育を行う公立学校で、インターンをはじめました。小学校5年生の日本語の授業で、個人ワークでつまずく子どもたちのアシスタントをしています。授業自体はカリキュラムに沿って行われていますが、授業の方法を放課後に先生と話し合ったり、子どもたちが喜びそうな小道具などを作ったりしています。このとき、先タームで取っていた「2nd Language Teaching」で習った教育方法論が大変役に立ち、私が授業で習ったことが活かされていると実感しました。例えば、日本語教育のために作られたCDなどを流して、数の数え方や計算を「音」と共に

インプットさせていくことや、子どもたちを机から立たせて、ダンスやリズムと共に「体」を使わせて日本語を教える方法です。「楽しみながら学習する」というのは、言語教育で非常に大切なことなのだと実感しました。

子どもたちのお母さんやお父さんから、日本人である私はとてもよく接していただいています。ほとんどの子どもは、お父さんお母さんの意向でこの友人学園に入学します。あるとき、なぜお子さんに日本語を学ばせたいか聞きました。「日本が大好きだから。」なんだか、照れくさいような、嬉しい気持ちになりました。

留学を通して気付いた自分の姿

この留学を通して、私はアメリカの大学でも「いける」と感じました。留学する以前、松本先生のご指導の下でアメリカの大学でどうやったら「成功」していけるかを学んできました。Critical Thinking や5パラグラフ・エッセイなど、初めのうちは慣れないことに戸惑いを隠せず、「大丈夫かな」と心配をしていました。しかしいざこちらに来てみると、日本で松本先生から学んできたことが十分に通用し、秋も冬もいいグレードをもらうことができました。大学のレベルにもよるのかもしれませんが、少なくともオレゴン大学において私は「やっていけるな」と感じました。



エンゼルのトリー・ハンターと



大リーグ・エンゼルの春季キャンプにて